

平成27年度 北海道小学校長会

第1回理事研修会

会長挨拶

昨日の総会・研修会、大変お疲れ様であった。
皆様のお陰で総会が順調に運営されるとともに、
提出議案の全てをご承認いただいた。厚くお礼
申し上げます。



平成27年度北海道小学校長会の活動計画、会務、決算・監査報告、予算等の議案が承認されるとともに総会宣言が採択された。今後は、業務執行機関としての理事研修会に委ねられる。よろしくお願いします。

本日の理事研修会では、各専門部の組織づくりと年間活動計画、平成28年度の文教施策に関する要望書、「新しい時代を見据えた本道教育の質の向上に向けた提言」、北海道小学校長会第58回教育研究十勝大会の分科会運営体制などについての協議をお願いする。

新年度、新組織としてのスタートに当たり、その一つ一つが大変重要な内容であり、昨日の総会を受けて本日から早速、北海道小学校長会の具体的な取組が開始される。

この1年間、校長の職能向上と北海道教育の振興・発展のため、各地区において理事の皆様が遺憾なく力を発揮していただけるよう、充実した研修・情報交流の場となることに努めたい。

第1回の理事研修会に当たり、今年度の北海道小校長会として大切にしていきたい点について5点お話しする。

1点目は、「アンテナを高くして最新の情報を共有すること」についてである。
私たち校長は、最新の正しい情報を素早く手に入れることが適切な学校運営にとって必要である。

最近の情報を例にあげると、本年3月27日に、文部科学省は学校教育法施行規則の一部を改正する省令、道徳に係る小学校、中学校等の学習指導要領の一部を改正する告示及び移行措置に係る告示を公表した。この学習指導要領の一部改正による「特別の教科 道徳」においては、道徳科という言葉を使い、4月1日より移行措置として実施が可能とされている。

さらにその内容を見ると「問題意識」や「問題解決的な学習」という文言をはじめて

道徳の指導要領の中で使ったり、多面的、多角的、多様な感じ方考え方、など多いという意味の「多」という文字が、前回の道徳の指導要領では0であったにもかかわらず、今回は9つも使われたりしていることからキーワードが見えてくるという大学教授の指摘がなされている。

これからの時代、未来を見据えていくためにも、現状を直視し正しく分析するとともに、将来を予想していく時代感覚が望まれる。

子どもたちに充実した“今”と希望の見える“明日”を支える教育活動を展開するために、「アンテナを高くして最新の情報を共有すること」を第一に考えていきたい。

2点目は、「本道教育の質の向上を目指した授業改善の取組」についてである。

教育再生実行会議の6つの提言をはじめとする教育改革の様々な動きの中で、本道教育の質の向上を目指すためには、「授業改善」が最も重要である。特に、授業を支える安定した学級ともいうべき、「学ぶ習慣のある学級づくり」と、「教員の授業力向上」が大切である。



この、授業改善の両輪ともいうべき「学ぶ習慣のある学級づくり」と、「教員の授業力向上」に向けた条件整備を、道中と意見をすり合わせながらまとめた提言について、この後、角野局長より提案し協議していただく運びとなっている。

両輪の一つ、「学ぶ習慣のある学級づくり」についてであるが、早稲田大学の河村教授は、開発した心理検査「Q-U」を使った学級集団づくりによる学力向上の成果から、次のように述べている。



「学級集団の状態を良好にしておかなければ、学習指導面と生徒指導面が相乗的に悪化していく。逆に支え合い、学び合い、高め合いのある教育力の高い学級集団に育成することができれば、学力向上を目指す取組の過程で、いじめや不登校の予防や特別支援教育の推進も期待できる」としている。

まさに、学力向上は、安定した学級集団からはじまり、さらに、いじめや不登校を予防し、通常学級にいる特別な支援が必要な子供の指導にも良い影響が出るというのである。

そのための条件整備として、「35人以下学級の更なる拡充等による少人数学級編制の実現」と「小学校における専科教員の増員」について提言している。

また、両輪のもう一つの「教員の授業力向上」についてであるが、「学校とは、ズバリ

そこにいる教員のことである」との識者の言葉があるとおり、教育活動の命は、教員の授業であり、確かな学力の向上は、毎日の授業改善にかかっていると言っても過言ではない。

しかし、1年間の学校での授業時数より、1年間にテレビゲームをしたり、テレビやビデオを試聴したりする時間が多い児童がたくさんいることが、以前から指摘されている。学校での授業が、ゲームやテレビより魅力的なものとなり、子どもにとって、充実感や達成感のある授業が必要である。

教育学者で作家でもある明治大学齋藤孝教授は、「これからはライブの時代である。間接的な情報なら何でも手に入る今だからこそ、生身の人間がその場に居合わせることに価値をもつのである」と、教員や子どもたちがライブで学習し合う授業の価値を認めている。

これらのことから、「授業力向上」に向けた研修の充実と、これから求められるアクティブラーニング等の授業の在り方の普及・啓発が欠かせない。

3点目は、「校長会としての意見表明や要望活動」についてである。

毎年、各地区からいただきました要望をまとめ、次の年度に向けた「北海道文教施策・予算策定に関する要望書」を、道中・道公教とともに作成し、道教委に要望している。先ほど申し上げた、「本道教育の質の向上を目指した授業改善」のために、「新しい時代を見据えた本道教育の質の向上についての提言～チーム北海道として～」という提言案を道中とともに作成したところである。この提言は、本道の教育環境や施策に対する各校長先生方の声そのものであると捉えている。

今後も、その時々状況を、アンテナを高くして把握し、喫緊の課題に対しスピード感ある情報の共有化を大切にするとともに、道教委等への意見表明や要望活動に結び付けていきたいと考えている。現状把握や道教委、市町村教委等への意見表明や要望活動のためにも、あらためて各地区の皆様のご協力をお願いする。

4点目は「チーム北海道として他の教育関係団体と協働する道小」についてである。

教育行政とは、「協力するところは協力し、主張すべきところは主張する」という姿勢を継続し、道教委を含めた教育関係機関、団体と「チーム北海道」としてのコラボレーションこそが、困難と思える目の前にある教育課題の打開に必ずやつながるのではないかと考える。北海道中学校長会、北海道公立学校教頭会はもちろん、



北海道教育委員会や各市町村教育委員会等の教育行政機関とコラボレーションしながら進んでいくことが大切である。また、北海道PTA連合会との協働による保護者や地域への啓発、各大学や北海道立教育研究所など研究・研修センター機関、さらに各教育活動を推進している民間教育団体等とのコラボレーションによる更なる研修活動の充実はとても重要なポイントとなる。

「未来を見据え、チーム北海道として進む道小」のキャッチフレーズの具現化が強く望まれるところである。

5点目は、「道小としてパワーアップするための組織の充実・改善」についてである。

今後の北海道小学校長会の組織や活動の充実・改善等について「組織の在り方検討委員会」が活動し、今年度も、会員の減少に伴う活動等の見直しも行うことができた。会員の減少による活動のスリム化は大切なことであるが、校長の職能の向上を図ることは、現在の教育の流れを鑑み重視しなければならない。

今年度、十勝小・中校長会の皆様に主管していただき、「北の大地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育む学校経営の推進」を大会副主題として、教育研究十勝大会を9月11・12日に幕別町と音更町で開催する。すでに現地では、実行委員会が組織され着実に準備が進んでいるとお聞きしている。充実した大会となるよう、道小としても研修部を中心に分科会の運営などについて検討している。

本年度も、校長会としての役割を自覚し、その活動を後退させることなく、活動改善と充実に向け、検討を重ねていきたいと考えている。

以上5点にわたり、道小として大切にしていきたい点についてお話しした。

教育者の東井義雄氏は、「子どもという命の袋の中には、いろいろな宝物が入っている。その宝物は子ども自身さえ知らずにいる」と述べている。

この言葉の意図するところのように、私たち校長は、まず、子どもの命を守り、子どもが持つ宝物である「様々なよさや可能性」に気づかせながら、人に愛され、人にほめられ、人の役に立ち、人から必要とされる幸せを味わえる人間となるよう育てていきたいと強く思う。



昨日の総会で申し上げた、「子供の瞳に光あれ、教師の心に喜びあれ、校長の顔に自信あれ、そして北海道小学校長会に活力あれ、さらに、チーム北海道に未来あれ！」を目指した活動になりますよう、理事の皆様のお力添えをよろしくお願い申し上げます。